

派遣者番号	30K17	氏名	萩原 農
研究主題 —副主題—	教員の授業力向上に向けたOJTの在り方 —学年会を活用した授業リフレクションプログラムの開発とその可能性—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	増田 謙太郎
所属校	日野市立日野第八小学校	校長	松永 式子

キーワード：OJT 授業省察 学年会 授業観 リフレクション

1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

文部科学省は教員経験年数が10年以下の教員が多数を占めつつある現在の学校現場の状況を踏まえ、OJTの充実、とりわけ授業研究をはじめとして校内における組織的・継続的な研修が実施されるよう実施体制の充実強化を図ることの必要性を述べている。

つまり、教員の資質・能力向上を図ることは、学校現場全体の重要な課題である。OJTガイドライン(東京都教育委員会)では、OJTは新たな時間や場所の確保をすることなく学ぶことができること、OJTを受ける側だけでなく行う側にとっても教えながら自分の指導や考えを見直す機会となること等の実効性が述べられている。

以上から、大規模校において学校全体の研修よりも少人数での日々の取組から行っていく方がよいのではないかと考え、学年団に着目した。

学年団の充実とは、3点の価値を見いだすことができる。1点目は協働による教員の能力開発、成長、2点目は、学年団をつかさどる学年主任の意識変化である。学年主任が育成及び運営を担う人材になることでミドルリーダーが増えると考えられる。3点目に、指導力向上、教員間の学び合いというビジョンと風土を醸成していくことによる学校づくりである。学校組織マネジメントの観点からも価値があると言える。

2 研究の内容・研究の方法

以上を踏まえ、指導技術や教科の専門的知識を授業実践に活用できる汎用的な授業力をどのように向上させていけばよいかを追究する。

本研究において「授業力向上」とは、「授業力の基盤である授業観の更新と醸成」と定義する。主な目的は次の2点である。

1点目は継続した授業リフレクションと学年会での活用の有効性を探ることである。学年集団を想定した小集団によるリフレクションの場を設定し、時間的負担をかけずに継続的に行う授業リフレクションの効果を検証する。

2点目は視点の焦点化によるリフレクションプログラムの有効性を探ることである。授業の対話的リフレクションプログラムの開発及び活

用を通して参加教員の授業力向上を検証する。

研究の方法としては、①授業に関して教員の意識、学年会の実態を調査するとともに、先行研究を基にリフレクションプログラム作成の視点を整理し、開発する。②小集団チームを組織し、授業観察を基にリフレクションの視点を定め、15分程度のリフレクションを継続して行う。③授業観察およびインタビュー調査によって、授業観の変容の有意性を検証する。

3 研究の結果

(1) 理論研究

若手教員の意識を分析した石原(2011)は、同僚と共に学ぶことこそ自律的に学び続ける主体として成長する可能性があるとし、学年団の有効性を述べている。山口ら(2006)は、授業における事象の意味を問い直し、新たな問題を認識することを重視した省察を特徴とした授業省察を試みている。

一方、高根ら(2014)は、VTRを活用した集団リフレクションや、校内研究の授業者として行う事後検討会では、回数や時間の確保が難しいことを指摘している。

以上から、学年会を活用する意義を以下の2点と考える。

1点目は教員自身の「自分ごと化」を促すことができるという点である。学年団には、①学習指導内容が共通②児童理解の共有③少人数による対話の促進の期待④コミュニケーションの醸成という特徴がある。

2点目は、回数の確保と継続性である。学年会は定期的な開催が担保されている。定期的に行事予定に設定されていることが多く、そこで行う30分から1時間の話合いの一部を活用できれば継続的に数多く行うことができる。

(2) 調査研究

学年会に関する実態調査を、都内公立小学校3校57名の通常学級担任に選択式のアンケート用紙を用いて行った。そこからは、学年会が授業改善や授業力向上に十分な機能を果たしていない状況にあること、その一方で同学年や先輩教員との協働を指向している教員が多いこと

が分かった。であるならば、学年会の議題に意図的に学習指導、特に授業省察を盛り込むことと、他の議題を圧迫しないように短時間で行うことが大切であると考えられる。

(3) 実践研究

(3-1) 視点の焦点化

検証協力者は、教員経験6年目以下の3名の教諭である。3名に対し、インタビュー調査及び授業観察を行った。各教諭の授業観、自身の授業の課題と理想の授業像について整理するとともに、授業の課題を整理した。

以上から、授業改善の視点を4点にまとめ、授業リフレクションに活用することとした。

(3-2) リフレクションプログラムの開発

私と協力者3名の4名で仮想学年団を編成した。まず、グランドルールを作成し、実施前に協力者全員へ説明して共通理解を図った。

リフレクションは15分間を毎週1回程度行い、一人の実践報告とそれに基づいた省察を対話型で行う。実践報告者は、1週間の自身の実践の中から事例を一つ選び、省察シートを作成する。リフレクションでは、報告者が簡単に授業の概要と自己省察を語る。その後、他の参加者はさらに報告者の省察を促す質問や問いかけをしながら対話していく。参加者の基本姿勢は事象の掘り下げと報告者の思考の掘り下げを促すことであり、そこに報告者の自己省察の深まりと、参加者の授業に関する新たな知見を得ることが期待される。

授業省察シートは、授業改善の4点を意識付けるためにチェック項目に起こした。それは45分を概観的に捉えるのではなく視点を明確にして省察シートを作成することで、対話がより具体的になりやすいようにするためである。

さらに、学年会において短時間で継続的に活用できるようにするために、教師の気になった場面を1, 2場面選び、その状況や教師の対応と自己省察を簡潔に記載できるようにした。それは、準備を極力減らし、15分で完結するために扱う場面を焦点化すること、省察シートを読み込む時間を少なくすること等を狙っている。

(3-3) 授業リフレクションの実施

9月から12月まで計9回を実施した。回数を重ねるごとに省察の質が変容するとともに、15分間の中でも自己省察と対話後の気付きに大きな変容が見られた。

(3-4) 授業観察及びインタビュー調査

授業リフレクション後に改めて授業観察及びインタビュー調査を行い、授業観の変容と授業の様子を関連付けながら分析を行った。

4 研究の考察

インタビューを分析すると、自己省察だけでは見えない他者からの影響によって自分の授業や授業観を再認識することができたことが分かる。同時に、他者の実践を語る過程で自身の実践を振り返ることができるという言葉などからも、対話による複数人での授業リフレクション自体が、授業者でも支援者でも自身の授業や授業観に影響を与えられたことが分かる。

つまり、授業観の更新のためには、授業リフレクションの視点を焦点化して行うこと、また授業省察ができるようになるためには対話によるリフレクションを行うことが有効であることが認められる。ゆえに、授業力の向上を図るうえでは、授業リフレクションプログラムが有効であったと言えよう。

日常的継続的なOJTという視点では、授業リフレクションプログラムは有効であることが明らかになった。学年会を活用して短時間で、継続して行うことは、授業省察の意識化や日常的な授業省察の習慣化につながり、同時に対話的に行うことで自己省察だけでは得られない成果をもたらすことができた。その検証を踏まえると、継続し習慣化していくためにも、週1回か2週に1回の実施が妥当だと考える。

さらに、大規模校では、学校全体の一斉の取組よりも小集団(学年団)規模での取組を束ねていくことが学校づくり、学校改善には有効であると考えられる。学年会を活用したOJTが機能することで、組織的な取組となると同時に学年主任を中心にミドルリーダーの育成につながり、学校改善へと発展していくのではないかと考える。

5 今後の展望

本来は各学校で教育目標や学校経営方針に基づいた授業力の定義があるはずである。その視点を加味することで個々人の授業観の変容から学校としての人材育成へとつながっていくのではないかと考える。今後は、管理職の授業観察や人事考課等と関連付けながら学校独自の視点に基づく授業観察及び授業リフレクションの可能性も探していきたい。

また、グランドルールだけでなく、ファシリテーションが効果的に行えることで授業リフレクションが機能するのではないかと考える。その意味で、学年主任等学年団のリーダーの能力開発も必要であろう。そして、学年会の機能を高め、学年組織の醸成を基軸にした学校組織マネジメントに結びつけていくことが必要となるだろう。学校づくりの観点からもアプローチしていきたい。